灰色の吟遊詩人　ローレン

ひとつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色の吟遊詩人　ローレン

【Ｎコード】
Ｎ１１２６Ｚ

【作者名】
ひとつ

【あらすじ】
ＭＭＯＲＰＧで遊んでいたはず男は、気がつくと吟遊詩人として見知らぬ森の中に佇んでいた。一万人近いプレイヤーが召喚されたのは一つの惑星。宇宙の最前線。神が外敵と戦う為に創造した戦場だった。プレイヤーたちは、そして一人の壮年の吟遊詩人は世界を守る戦いに身を投じる。
※本当に久々に小説でも書いてみようと思い、練習がてらこちらで投稿させていただきます。
Ｒ１５その他警告タグを登録していますが、ストーリー展開の縛り

を出来るだけ減らすためのものであり、性的表現や残虐表現などは出来るだけ排除する方針です。
１週間に１回の更新を目標とします。

はじまりのその前１（前書き）

はじめまして。拙い文章ですが楽しんでいただけると幸いです。また、誤字脱字、わかりにくい表現などご指摘いただけると助かります。

はじまりのその前1

そこは深い森の中、常ならば早朝の健やかな空気と飛び立つ鳥、巣へ帰る獣たちの空間。だが、今日に限っては騒がしい喧騒がその一角を支配していた。

色濃く茂った木々をすり抜けるように、初老の男が走っている。朝露に濡れる葉に触れる僅かな音や、装飾の施された薄皮鎧に水滴が滴ることにも構わず姿勢よく走るその姿はある種の映画のようにも見える。

所々木々の根が張り出している森林の地面は決して走りやすい場所ではないはずだが、速度を落とすことなく一定の速度で走り続ける。驚いたリスが木の上へと避難していくのだが、それも目に入らないようだ。

なぜ男が走っているのか、その答えは男の後ろから迫りくるものにあった。

振りかえった男の視界に映るのは醜い子鬼のような生物数匹。息を切らしながら走り、男の後を追ってきている。

子鬼たちを確認した男はうっすらと笑みを浮かべると、手にしていた小さな赤い石を後ろに軽く放り投げた。

石は子鬼たちの目の前に落ちると、爆発音と共に直径三十センチほどの小さな火球となり、爆発に巻き込んだ先頭を走っていた子鬼を痛みで立ち止まらせた。

しかし他の子鬼たちは怪我をした仲間を気遣うこともなく、若干速度を落としただけで一掃怒りを燃やし男を追う。立ち止まった子鬼も最後尾を来た派手な装飾の子鬼に小突かれ怒鳴られ、再び仲間たちに追いつかんと足を動かしはじめた。

それからおよそ三十秒後、男性が辿り着いたのは森の中にぽっかりと空いた縦長の空き地のような場所だった。幅にして五メートル

ほど、長さも精々十五メートルほどのその空き地は、下生えの雑草など邪魔になりそうなものを排除した明らかに人の手が入っている人為的な空間。そこは戦闘の為に男とその仲間たちが用意した決戦の舞台だった。

空き地の中ほどまで来た男は立ち止ると、いつの間にかその手にもっていた背丈ほどの杖を構える。両端を金属で補強された真直ぐな杖で拍子を刻むように地面を突くと、驚くほど澄んだ音がまるで鉄琴のように鳴り響く。

男はその音を確かめると目を閉じ、そして朗々と歌い始めた。

“猛る心、止めることなく
燃え盛る炎、鎮めることなく
泣け、叫べ、怒れ、吼えろ
その身焦がす紅蓮の糧は
その身焦がす紅蓮の行く先は
唯一つ、汝が前に立ち塞がりし者の命“

杖の刻む音に男の低く想い歌声が加わり、音楽がその空間を支配した。

吟遊詩人が使う〈魔導詩〉。それは歌に込められた力で聞いたものを、時には無生物でさえも導き操る特技の総称。

初老の吟遊詩人の歌う魔導詩が発動すると同時に、同じ道を皮鎧を着た男が走ってきた。その後ろには十匹ほどの子鬼たちを連れている。

吟遊詩人が小火球の小石を使い引き離した子鬼たちを、別の集団を引き連れてきた皮鎧の男が拾ってきたものだ。

「今だっ！」

「せーのぉ！」

皮鎧の男が広場に入り数歩走ったところで叫ぶと、空き地の左右に分かれ潜んでいた二人の女性が掛け声と共にロープを引っ張った。
皮鎧の男の後ろ一メートル、今まさに斬りかかろうとしていた数匹の子鬼がつんのめり転倒した。その足元には広場を横切るように張られた一本のロープ。転がっていないのは、最後尾にいた派手な飾りをつけた二匹の子鬼だけ。
「よっしゃぁ！　やっちまえぇ！」
「承知！」
「オッケー！」
「はいっ！」
「いきますよぉ～！」
皮鎧の男が嬉しそうに叫びながら短剣を右の飾り子鬼に投げつけると、木々の間に隠れていた四人が広場へと躍り出た。
入口側から二人、吟遊詩人の後ろから二人。

入口側から踊りこんだ板金鎧姿の少女が両手で構えた剣を大きく振りかぶり跳び上がる。「ライジングスラッシュ！」
戦士の特技〈ライジングスラッシュ〉が描いた黄金の軌跡が、短剣を左腕に受け怯んでいた飾り子鬼を袈裟切りに斬り裂く。
呻く飾り子鬼は呪文を唱えようと杖を掲げるが、再び飛来した短剣が杖をもつ右腕に刺さった。盗賊の特技〈二突き〉による小型武器での二連撃は、敵の不意をつき意識を逸らす。
そして出来た僅かな隙。羽織袴に和風具足をつけた女性にはそれで十分だった。駆け抜けざまに抜刀、刃が残す銀光は子鬼の飾り建てた首を切り落とす、侍の特技〈一閃〉で止めをさされた飾り子鬼はガラスのように砕け散った。
だが、敵は一体ではない。
一切の攻撃を受けなかった左の飾り子鬼は呪文を完成させ、転がっていた数匹…八匹の子鬼が立ち上がろうともがく。
しかし、その動きの尽くは吟遊詩人たちの予想していたものだっ

た。

飾り子鬼の呪文は〈火蜥蜴の尻尾〉小火球を単体に叩きつける攻撃魔法だ。振り上げた杖の先に浮かぶ小さな赤い魔法陣から直径三十センチほどの火球が板金鎧の少女を襲う。

「させませんっ、アクアシールド！」

白いローブを翻した少女が唱えた呪文は白魔法使いの特技〈アクアシールド〉対火属性に優れる防御魔法だ。

「サリュ、頼んだよ！」

仲間に呼びかけた板金鎧の少女の前に青い魔法陣が出現、迫る小火球と接触するや爆発が起こったが、その後には鎧をわずかに焦がしただけの少女が元気に剣を構えていた。

転んだ子鬼たちは立ち上がろうとしていた。

「悪いけど～、もうちょっと待っててね～。ミスト～ヴェ～ル～」

黒いローブを来た女性は慎重に距離とタイミングを測り、のんびりと呪文を唱えた。黒魔法使いの特技〈ミストヴェール〉半径五メートルに濃い霧を発生させ、その場にいる全てのものの平行感覚を狂わす魔法だ。

立ち上がろうとしていた子鬼たちは、あるものは自らの上に乗っかっている同輩を突き飛ばし、あるものは下を踏みつけても立ち上がろうとするが再び転び同輩を下敷きにしてすっ転ぶ。効果時間は１０秒とけっして長くはないが、それは貴重な時間稼ぎとなる。

そして吟遊詩人の男は油断することなく、戦闘の推移を見守りながら歌を、吟遊詩人の特技〈狂戦士の舞戦歌〉を歌い続けている。

物理攻撃力を強化する代わりにあらゆるダメージに対する防御力が減少する両刃の剣は、

範囲内の敵味方関係なく効果を発揮する初期の魔導詩の中でもさらに使う状況が限定される特技だが、現状では劇的に有利な効果を発

揮していた。
ミストヴェールが消える前に二匹目の飾り子鬼も倒れ、吟遊詩人が歌を止めた頃にはほとんど勝敗の帰趨は決していた。

◇

「ふむ、なんとかなりそうじゃな」
暗い部屋の中、モニターに映る戦闘場面を眺めながら男は呟く。年のころは三十路すぎ、がっしりとした体をゆったりとした室内着で包み、ＰＣの前に座っている。鋭い目つきをさらに尖らせゲーム用コントローラーを握っている様子は随分と楽しそうだ。今の呟きも意識せずに、つい漏らしてしまったのだろう。
「始まってすぐにゴブリンシャーマンを一体落とせたのが大きかったですね」
「ふふふっ、我らの連携の勝利ということだな」
「それもこれも俺がナイスな誘導で敵を連れてきたからだね！」
「はいっ、御苦労さまでした」
「地道に草刈りしたり～道を整備したり～、したかいがあったわね～」
二匹目のゴブリンシャーマンも撃派したことで余裕ができたのだろう。男の呟きに反応して、楽しげに皆が話し始めた。

はじまりのその前2

「ローレン殿、私がお引き受けする！」
「ありがたい、お願いするよカグヤ嬢」
黒地に桜の花びらが舞っている羽織を翻し、侍カグヤが吟遊詩人ローレンを攻め立てていたゴブリンの前に進み出る。地を滑るような動きにゴブリンは攻めあぐね、その隙を衝きローレンは安全に後退した。
残る敵はゴブリンが三匹。
味方も前衛に立っていた四人が手傷を負っていたものの重傷者気絶者はなし、戦線を突破されることもなく、ほぼ完勝と言ってよい状況だ。
こうしている間にも戦士アリスが両手剣で一匹を仕留め残りは二匹。戦闘開始から二分ほどでこの状況ならば、彼らには理想的な戦況だった。
「周辺に敵影なし！　戦列はそのままでオッケーよん♪」
いつの間にか姿を消していた盗賊ミウラが、魔力を使い果たし切り株に座り込んでいた黒魔法使いリリーの横に現れて報告する。
「ありがとうございます、ミウラさん」
戦士と侍がそれぞれ一対一の戦いを繰り広げている様子から目を離さず白魔法使いマリアーヌがミウラを労った。いつでも前衛二人を回復できるように備えている為、常に比べてその言葉は簡潔だ。
アリスとカグヤがゴブリンを圧倒していることもあり、ローレンは満足気に呟いた。
「やっぱりこの一体感が最高じゃな」
「ふふっ、その一体感を感じられるのも先輩を誘った私の手柄ですのでお忘れなく」
「こら、誰が先輩じゃ！　ワシはローレンじゃぞ？」
「む、これは失礼した。ローレン殿」

狙ってなのか意識せずになのか素に戻ったカグヤをローレンがたしなめたが、謝りながらもカグヤの楽しそうな笑い声がイヤホン越しに聞こえる。まあ、自分の趣味に付き合ってもらっているのだ、あまり文句も言えないな…とローレンは苦笑するしかない。

ローレンはいわゆるロールプレイヤーだ。

ゲームの中でキャラクターを演じ、プレイヤーとしての発言は最小限に止める。

対してカグヤはゲームを攻略することを主目的としているらしく、キャラクターを演じることに拘りはもっていないらしい。

現実世界の仕事で先輩後輩関係の二人は、当然現実ではごく普通の一般人であり、名前も違う。

この後輩は常に先輩を立てていた。それは共にゲームをするようになっても変わらず、ローレンのスタイルに合わせてロールプレイ重視でプレイしている。

なお、他の四名はリアルでのローレンの知り合いではない。

今回攻略している低レベル用シナリオクエスト『ゴブリン王の生誕』の為のパーティ募集で集まった仲間たちだった。

シナリオクエストとは2～5話のクエストで構成される物語性の強いクエストだ。

通常は固定メンバーではなくてもクリアできるのだが、今回は6人全員が時間を会わせることが出来たので固定メンバーでのクリアを狙っている。

またアリス、リリー、マリアーヌの3人がロールプレイヤーでありミウラもノリの良い少年だったため、ローレンとしては充実したゲームを楽しめていた。そしてそれは他の五人も同じだったらしく、すでにこのシナリオクエスト攻略後の予定も話し合っているほどだ。

これもカグヤのお陰だな…最後のゴブリンが倒し、歓声を上げる仲間たちとモニターの中でハイタッチを繰り返しながらも、ローレンはしみじみとそんなことを考えていた。

はじまりのその前２（後書き）

ちょいと短いですが、切りよくこの辺で。
やっとシステム周りをちょっと書きましたが、ゲーム名も出てないのはご愛敬ですかね。

新しい日

冬特有の張りつめた空気の中、山間にあるその森には東の空に昇った太陽から日差しが降り注いでいた。
その森には動物たちの水場となっている泉がある。今も一匹の猫のような小獣が、水を舐めるように飲んでいる。
いつもと変わらぬ日常がそこにはあった。
しかし…その時、水を飲んでいた小獣がウサギにも似た垂れ下がった耳をピクリと揺らし、顔を上げた。

なにかに頬を突かれている。
彼が暗い闇の中から浮上して始めに感じたのは、自らの頬をつつく感触。
次いで感じる眩しい光は、瞼を通してぼんやりと明りを感じさせる。そうか、自分は眠っているのだな…起きぬけの頭でそんなことを考えた彼は、ゆっくりと瞼を開いた。
「うっ、眩しい……」
明るい日の光が思いのほか目に突き刺さり、急いで手を挙げ光を遮った。二度三度瞬きをするとやっと周りが見えてくる。
そこに見えたのはいつもの部屋の天井ではなく、広く枝を広げる針葉樹と青い空。え…と間の抜けた声を漏らし、体を起こしながら辺りを見回した。
「な…んで…外で…」
彼の目の前に広がっているのは豊かな自然。この辺りは針葉樹林らしく、細い葉を茂らせた背の高い樹木が並んでいる。すぐそばには細く小さい川がささやかに流れ、座り込んだ彼のすぐ横に目を丸くをしてこちらを見ている猫とウサギを合わせたような小動物がいる。
「……って、猫？」

みあぁ、自分が呼ばれたのが分かったのか、彼を見上げ嬉しげに鳴き声を上げる。
かわいらしい鳴き声と仕草がパニックに陥りかけた彼の心を穏やかに押しとどめた。
落ち着く為だろう、大きく息を吸いゆっくりと息を吐く。そうして数度深呼吸を繰り返した彼は、猫ウサギの喉元へ指を伸ばし撫でてやりながら聞いた。
「夢じゃないよなぁ？」
みゃ～ん、返事は実に可愛らしい声だった。

体感でおよそ3時間後。太陽が真上に来ているので昼くらいなんだろうな…ローレンは水を堅く絞ったタオルで体を拭いていた。
その足元で猫ウサギがのんびりと日向ぼっこをしているのだが、それにも気付かずローレンは困惑に包まれていた。
「ローレン…なんだよなぁ」
呟きに反応して猫が鳴き声をあげたが、ああ、なんでもない…と手を振ると納得したのかまた日向ぼっこに戻って行った。
「こいつもなんでこんなに人に慣れてるんだろう……ってそれどころじゃないって」
目を覚ましてしばらく、ローレンが自分の異変に気付くのに大した時間は必要なかった。なにしろ、つい先ほどまで着ていたはずのジャージはどこかに消え、自分が身につけているのは青いシャツと白いズボン。その上に装飾の施された薄皮鎧を着込み、足元は皮のブーツ。
そしてなによりも、ローレンのすぐ脇に転がっているのは両端を金属で補強された杖『琴唱棍』、つい先ほどまでモニターの中にいた自分の分身が愛用している武器だった。

そこからは忙しかった。
思いつくままにこの手の話でありがちな行動を試していった。

その手の話、つまりはゲーム世界へと侵入してしまう話。初めてそのジャンルが生まれてすでに半世紀。一つのジャンルとして確立されており、ローレンも小説を好んで読んでいた。

そして分かったこと。それはこの世界はゲーム世界に限りなく近くはあるが、ゲーム世界ほど便利ではないということだ。

まずステータス画面を開くことが出来ない。

つまりレベルや能力値、特技や固有能力の確認が出来ない上、ログアウトボタンやＧＭコールは勿論、プレイヤー間で使えたメール機能やフレンド登録も使えない。

次に各種アイテムを保管し自由に出納できるアイテムボックスは作動してくれた。正直これはありがたかった。所持数に上限があるとはいえ、予備の装備や回復薬に換金出来そうな品物、そして現金とゲームで所持したものがそのまま手元に残っているのだ。現在いる場所がどこなのか、そもそもどんな世界なのかも分かっていないので、役に立つのかどうかも分からないのだが、裸で放り出されたかもしれない可能性を考えれば運が良いと思えた、思うことにした。

肉体的には高性能なのは間違いない。実際の自分では出来ないような動きが可能だ。だが半面、ゲームのように疲れ知らずに走り続けることは出来ないし、ナイフで指先を切ってみたところ痛みがあり血も出た。

死んで生き返れるのかは正確には分からないが、試す気にはなれなかった。

最後に、この世界で生きていくことを考えると重要になるだろう、吟遊詩人としての能力。手持ちの魔導詩の全てを歌い、数少ない戦闘特技も試してみた。

結果から言えば、特技は問題なく使用出来た。ただしかなり勝手が違う。この辺りは慣れていくしかないだろう。

そこまで考えたところでローレンの腹が鳴った。

「やっぱり腹も減るのか……そういえば何も食べていないなぁ」

新たに判明したこの世界の法則を頭のメモに書きいれた。

目が覚めてから何度もこれが夢なら良いと思っていたのだが、次々に現実である可能性が高まってくる。
にあ？　いつのまにかローレンの足元に来ていた猫ウサギが見上げて一声上げた。
まるで慰めてるみたいだな…そう思い、ローレンは苦笑する。小動物にまで慰められるほど情けない顔をしているのだろうか？
思い起こしたのは、先ほど泉に映った自分の顔。それは初老として設定したローレンの顔と三十路過ぎの本来の自分の顔を足して二で割ったような四十代男性の顔だった。

新しい日（後書き）

さて、3回目の投稿になりますが、なやんでいるのは区切りをどうするべきなのか。　次に引きを作るのがよいのか、キリよく終わらせるのが良いのか…悩みどころです。

出会い - クロエル -

噛みごたえのある燻製肉をナイフで薄く削いで口に入れ、奥歯で咀嚼する。食べ始めたときにはとても美味いとは思えなかったが、ゆっくりと噛み続けることで何とも言えない旨味が出てくることに気づき、ローレンはいつの間にか食事を楽しんでいた。

さまざまな特技を試して汗をかいたローレンは、汗を拭うと新たなシャツをアイテムボックスから取り出し食事にすることにした。

どうやら今の季節は現実と同じで冬なのか、あるいはいつでも寒い地方なのか、水タオルで拭った体は寒さを覚えるほどで、初めは火を熾そうと思っていた。

しかし火を熾せる火精石を昨日の戦闘で使ってしまった為、火を熾す道具がなかった。

野外活動に慣れているものならば、なんらかの手段で火を用意できるのかもしれなかったが、都会に生まれアウトドアにさほど興味も持たなかったローレンに実行できるものがあるとも思えない。

それでも暖かい食事に未練が残っていたローレンだが、やけに人懐っこい猫ウサギまで腹を鳴らして切なそうな顔をしているのを見て諦めた。

無視すれば良さそうなものではあるが、知らない場所によくわからない状態で飛ばされてきたローレンにとって、目が覚めたときから傍にいるこの猫ウサギには何ともいえない愛情を感じていた。猫好きだったことも関係しているのかもしれないが。

ちなみにローレンの横では、猫ウサギも食事をしている。肉に魚にパンと色々与えてみたところ、乾燥果物のイチゴを気にいったようでうっとりとした眼をして夢中で食べているのが愛らしかった。

ローレンが再び肉にナイフを差し入れたその時、茂みをかき分け

る音がした。
　吟遊詩人であるローレンの聴覚はかなりの精度で周囲の音を聞き分けていた。食事中にもさまざまな動物が、数十メートル内を動いているのが確認できていたほどだ。しかし茂みをかき分けた存在にローレンはまったく気づくことが出来なかった。
　現れたのは軽鎧を着て剣を腰につるした十代後半の少女。黄金色の髪を背中で纏めており、長い手足と均整のとれた体つきが印象的だが、そのエメラルドのような瞳の力強さが初めの印象を大きく変貌させる。
「やはり人が居られましたか」
「…人がいると意外…かね？」
　少女はしっかりと確認するように声をかけてきた。
　ローレンは驚きを出来るだけ押し隠し、返答を返す。言葉が古臭くなったのは、おそらくローレンの外見からかなりの年上だと判断した少女が改まった言葉を使ったので、それに合わせた結果だ。
　少女は一礼しローレンに向かって歩いてくる。
ローレンから見て、初めは俊敏で美しい鹿だと思った。しかしこちらを目踏みするように、だが決して礼を逸しないその堂々をした態度は、彼女を獅子の如く見せている。
身目麗しいその姿は、むしろ可憐と表現するべきものだが、彼女の本質はその心にこそあるのだろうと思えた。
「突然申し訳ありません、すばらしい歌声が聞こえたものでつい誘われてしまいました」
「ほう、それは嬉しいことを言ってくれる。よろしければ可憐なお客様の名前を教えてくださるかな？」
　にこやかに笑いかける少女は実に魅力的だったが、ローレンにそれを楽しむような余裕はなかった。
　情けない話だが、突然現れた美人が友好的に近寄ってくることに色気よりも危機感が刺激された。美人だから善人などという幻想は持ち合わせていない。

ローレンが三十数年を生きてきた経験からすると人を騙すような卑しい人間には見えない。だが、右も左もわからないこの世界でその経験がどれほど有効なのか、自信よりも不安が強かった。
警戒しているのは少女にも伝わったのだろう、少女は困ったように歩みを止めた。
「名乗りが遅れ申し訳ありません。私はクロエル・フォーランド。少々気がかりなことがあり、この森を探索しておりました。こちらにお伺いしたのは真実、あなたの歌に誘われたからなのです」
困ったように弁明する少女を見てローレンの良心が痛む。精神年齢三十路のおっさんとしては子供を苛めてるような気がしてしょうがない。
「いや、事情があってこちらも少々過敏になっておったようだ。こちらこそすまんな。とはいえ、足音を潜めて人に近づくのは次から遠慮していただけるかね？」
できるだけ優しい口調で冗談っぽく釘をさしておく。少女は安心したようすで頷いてくれた。
「ワシはローレン。故あって旅をしているしがない吟遊詩人だ…そしてこれは、猫ウサギ」
人間たちの様子も構わずイチゴと格闘している猫ウサギを抱き上げ、クロエルに紹介する。場を和ませるためだったが、効果は劇的だった。
「うわっ、かわいいです！　えっ、この子はあなたのペットですか！　うわわっ、撫でてもいいですか！！　ていうか撫でさせてください！！！」
一気にテンションが上がったクロエルは返事も待たずに駆け寄ると猫ウサギを撫で始めた。実に幸せそうにしているのだが、先ほどまで発していた威厳のようなものは霧散しており、ごく普通の…いや、むしろ普通じゃないほどのテンションで少女と化していた。
クロエルが正気を取り戻したのは、さんざん猫ウサギを撫でて抱

いて話しかけて、名前を聞いてきたので名前がないことを伝えたローレンに憤慨して自分で名前をつけようとして、悩みながら猫ウサギを撫でて抱いてついに根気よく耐えていた猫ウサギの抗議を聞いたローレンがクロエルと猫ウサギを引き離したそのときまで続いた。

時間にして十分ほどの出来事が終わり、現在二人は向かい合って腰を下ろしていた。

クロエルに辟易したらしい猫ウサギは座っているローレンの膝の上で不貞寝している。

クロエルはその様子を羨ましそうに見ているが、嫌われたくはないのか自制して無理にそれ以上触ってこようとはしなかった。

「いやはや、クロエル殿はかわいいものが好きなようだな」

「ううっ、お恥ずかしいところをお見せしました」

どうやら理性も戻ってきたらしく、ローレンのからかいの言葉にクロエルは顔を赤らめている。

年相応のその様子を微笑ましく見ていたローレンは、彼女の為に話題を変えることにした。

「ところで先ほどクロエル嬢は気になることを言っていたようだが…」

姿を現したときクロエルは、やはり人が居られましたか、と言っていた。少々奇妙な言い回しであり聞きようによっては、人ではない可能性もあったという意味にもとれる。

ローレンとしては少々気になったので聞いた程度のことだったが、クロエルはその質問を受け、表情を改めた。

「ええ、実はそのことでローレン様にお聞きしたいのですが…」

真剣なクロエルに対してローレンが居住まいを正したそのとき、絹を引き裂くような悲鳴が森に響いた。

突然の出来ごとに二人は顔を見合わせたが、すぐに立ち上がり悲鳴の聞こえた方向に揃って走り出した。

初めての戦い、そして予感

悲鳴の主を見つけるのに左程時間はかからなかった。まず聞こえてきたのは甲高い囃し立てるような声だった。意味のわからない耳に障る騒音はローレンの知るものだった。

「ゴブリンが、獲物を追っているようだ」

「獲物、ですかっ」

全力で走りながら最小限の会話を交わす。

情報は少しでも多いほうが良いだろうとローレンは伝えたが、クロエルはより一層表情を堅くした。先ほどの悲鳴とゴブリンが獲物として追うものとなれば、当然それは…。

ローレンがそう考えている間にそれは見えてきた。一人の少女が十匹近いゴブリンに追われている。

「居ました！　私はゴブリンを！」

「うむ、少女は任された！」

クロエルは剣を抜きつつゴブリンに駆け寄っていくと、走る勢いのまま二匹まとめて胴を薙ぐ。下段から斜め上へと逆袈裟に切り上げた細剣は眩い銀光を発し敵を絶命させた。

強い！　ローレンはクロエルの技量に驚きながらも、逃げてきた少女を腕を広げて受け止めた。

「我々は味方だ、助けにきた」

少女は背中や腕に多数の傷を負っていた。ゴブリンたちに遊び半分追いかけまわされたのだろう。いまだ恐怖に歪む顔は涙に濡れていた。安心させるように一度強く抱きしめると、強張っていた手足の力が抜ける。

「よく頑張ったな、後は我々に任せるがよい」

力の抜けた少女を木にもたれかけて座らせ、その前に立つ。

先制の不意打ちで二匹を倒したクロエルはその後さらに一匹を屠っていた。しかしさすがに全ての敵を引きつけておくことは出来な

かったようで、三匹がローレンと少女に向かってきている。
ローレンはアイテムボックスから愛用の吟唱棍を取り出すと両手で構え、敵を迎え撃つべく構えをとった。およそ初めての生身での戦闘だったが恐怖を感じる余裕は無かった。思うことはただ一つ。
「彼女には指一本触れさせん！　私が守る！」

◇

「まずは怪我を治さんといかんな」
戦闘が終わり、すべてのゴブリンが絶命していることを確認した三人は怪我の治療を始めた。もっとも追われていた少女、ユリアは泣きながら礼を言うばかり、ローレンは薬草を持ってはいたが使い方が分からず、実際に治療を行ったのはクロエルだった。
戦闘は五分とかからず終わった。クロエルが九匹、ローレンが二匹のゴブリンを倒したのだが、怪我はローレンが最も多く次いでユリアであり、クロエルに関してはかすり傷が数か所出来ているだけだった。
ローレンが動けないユリアを抱き上げ泉まで戻るとクロエルが自分とユリアの傷と体を洗った。その間にローレンは薬草を潰しておく。
そして女性陣が薬草を付け包帯を巻いている間にローレンが傷と体を洗い、最後にクロエルの処置を受けた。
その間にユリアも正気を取り戻し、傷の手当てが終わるころにはそれぞれの事情も話し終えていた。

助けた少女、ユリアはこの森を抜けてすぐの村の住人だった。森の外周部は危険な獣もほとんど居ないため、栗を採りに森に入ってきたらしい。
しかしいつもなら安全な、森に入ってほんの十五分ほどのところでゴブリンを発見。見つからないようにとしているうちに森の奥ま

で入ってきてしまい、結局ゴブリンに追われる羽目になったらしい。
「そんな場所までゴブリンが…、私は森の奥にゴブリンが住み始めたとの話を聞き確認に来たのですが、本当だったようですね」
難しい顔で呟くクロエル。なぜ彼女がそんなことをしているのかというと、彼女がこの地方の領主の娘だからとのことだ。
ユリアが正気に戻り、クロエルをまじまじと見つめ「お嬢様！？」とたいそう驚いたので発覚したのだが、実はローレンはそれを予測していた。クロエル名乗った家名に覚えがあったのだ。　もっとも領主の娘がなぜ一人で？　と別の疑問もあったが、結局聞きそびれてしまった。クロエルの強さを目の当たりにした直後だったので、その強さに納得した部分もあるだろう。
ちなみにローレン自体もなぜこの森に来たのかと聞かれたので、なにものかに魔法かなにかで飛ばされてきたらしいと答えておいた。
ユリアは納得して同情してくれたが、クロエルは妙な顔をしていた。
だが、それよりもローレンには気になることがあり、それを確かめる為にはユリアがいるのは不都合だった。戦えないものを危険にさらすわけにはいかない。ありがたいことに村までは一時間もあれば戻れるらしいので、三人はまずユリアの村へと向かうことにした。

悪夢、そしてクロエルの思い（前書き）

なんだか説明っぽくなってしまい納得できませんが、今はこれ以上無理なようなので止まるようは進めることにします。少々読みずらいかと思います、申し訳ありません。

悪夢、そしてクロエルの思い

夜の街、雑多な人々が交差点を行き交う。
それはいつのも光景。
点滅する信号を見た人々が小走りに横断歩道を渡り、客待ちのタクシーはまるでリピートする映像のように駅前に並んでは人を乗せ去っていく。家路を急ぐくサラリーマン、これから出勤する風俗嬢、人目も憚らずキスを繰り返す恋人たちは高校生だろうか。
空に美しい三日月が浮かんでいるというのに、見上げる者は滅多にいないだろう。街の明かりは煌々と輝き、より明るく人々の目を誘っているのだから。
それが何時もの光景、そのはずだった…。

今、男が走る夜の街は阿鼻叫喚の地獄と化していた。
至る所に死体が転がり、剣戟と銃撃、悲鳴と怒号、享楽と悲嘆、さまざま事象と感情が入り混じり、敵も味方も混沌とした混乱の中、驚くほど簡単にいくつもの命が消えていく。
死は生と等しく人に訪れる運命。
いつか本で読んだ言葉、それを嫌というほど思い知った。父母の死を間近に見た経験がなければ泣きわめき胃液を吐いて逃げ惑っていたかもしれない。
いや、むしろただの民間人でしかない男は逃げるべきだったのかもしれない。しかし、テレビに映し出された現実とは思えない凄惨な光景に彼女の姿を見て、なにかに突き動かされるかのように男は走り出していた。
だが男は物語の主人公ではなく、魔王を倒す勇者でもない。
辿り着いたその場所で待っていたのは、剣に貫かれた一人の女。
それでも彼女は手に持つ拳銃で剣を持つ怪物を撃ち倒した。そして血を吐き…倒れ伏す。

男は一刻も早く辿り着こうと必死で走るが
その距離は一行に縮まらない。なのに血を吐き倒れる彼女の唇がわずかに動いたことがはっきりと分かった。楽しげに歌うように喋るいつもの彼女とはちがう、悲しさに彩られた声が聞こえてきた。
「…先輩…」

◇

みゃー、頬を舐めるザラリとした感触とその鳴き声は、今日一日ですっかりおなじみになった感触だった。
ローレンが目覚めると目の前に猫ウサギが居た。
大きな目で顔を覗き込む猫ウサギは、眠りから覚めたローレンをじっと見つめている。
長椅子に座ったまま眠っていたローレンは堅くなった体をほぐす為に軽く伸びをする。
「うむ、どうかしたかね？」
「お休みのところを申し訳ありません。話しが纏まりましたので…」
猫ウサギに話しかけたのだが、答えは以外なところから来た。
扉を開けた姿勢のままクロエルが控えめに声をかけてくる。
「父への援軍の要請はすでに出発しました。今日中には到着するはずです。森への偵察も信頼できる猟師がいましたので彼に頼み、行ってもらっています」
「ふむ、よそ者の推測でしかないというに…ありがとう」
「いえ、事実だとすれば大事です。出来ることはしておかなければなりません」
「して、避難のほうはどうかね？」
「そのことなのですが、この村の方々は避難に応じてくださいました。ただ…」
クロエルが言葉を濁らせたが、ローレンが無言で続きを促すと話しを続けた。

「老人や子供が多いため、もし本当に来るのだとすると非難が間に合いそうにありません」
それはローレンがクロエルに相談したときに可能性を示唆されていたことだった。
万が一を考え次善の策も二人で考えはしたが…汗で張り付くシャツの首元を開き空気を入れながら、聞き続けるローレン。
「ですので、砦跡へ避難するということで話がつきました」
「そうか…危険には違いないだろうが、備えがあるだけ良いと考えるしかあるまい」
「はい、それで私はこれから隣村にも避難を促しに行ってきますが…ローレン様は…その、いかがなさいますか？」
「私はこの村の方々とともに砦跡に向かうとしよう。休ませてもらったので体もだいぶ良くなったようだ」
面倒事をすべて押しつけてしまったな、申し訳なさそうに苦笑を浮かべるローレンに、クロエルはなにか言いたそうに逡巡したが、結局はいとまを告げ部屋を出て行った。

ローレンが休んでいた小屋を出たクロエルは遠く見える森を睨みため息をついた。
みゃー、後を追ってきた猫ウサギがその足元に体を擦りつけ一声鳴く。
その愛らしい様子に頬笑みを浮かべたクロエルが猫ウサギを抱き上げる。
「ねえ、なぜローレン様はあんなにも自然にこの村を守ろうとしてくれているのかな？」
尋ねられた猫ウサギは首を傾げ一声鳴いた。
「普通、冒険者や旅人は自分の利益にならないトラブルと嫌う。ましてや命の危険が大きいとなれば、それなりの対価がない限り動こうとはしないわ」
くわしくは聞いていないが、ローレンはおそらく冒険者か旅人だ

ろう。
十分な教養を受けたもの特有の語り口などからみるに生まれや育ちは悪くはないはずだが、貴族社会では下賤の者と侮蔑される対象だ。
それがこの世界の常識。国という後ろ盾を持たない彼らは、よほど名前の通った一部のものを除き、その本質はただの荒くれ者にすぎない。犯罪者と変わらないと断言するものも少なくない。
事実、クロエルがいままで出会ってきた冒険者たちは理に敏くずる賢いものが多かった。
そんな中で会ったローレン。
森で聞こえてきた様々な歌。力強く、時に繊細に、心揺さぶられる歌声に引かれ始めて彼の前に出て行った時、正直に言って驚いた。
明らかに冒険者と分かるその姿からは想像出来ない、落ち着いた低い声音。切れ長の鋭い目は微笑むと印象が大きくかわり、暖かい眼差しを投げかけてくる。今腕の中に抱いているこの猫ウサギを見て取りみだした時も、さりげなく話しを変えようとしてくれた。
そしてなによりも、ユリアの悲鳴を聞いた時に迷うことなく助けに走り、今また誰に頼まれたわけでもないのに自然にこの村の人々を、守ろうとしている。今日初めてあった人々を、なぜそこまで自然に助けようとするのか、命を賭けられるのか。
なーお、猫ウサギが舌を伸ばしクロエルの頬を舐めた。その顔は自慢げに笑っているようにクロエルには見えた。
「なんで貴方がそんなに偉そうにしているのよ、ローレン様は別に貴方のご主人さまってわけではないのでしょう？」
笑いながら喉元を擽ってくるクロエルに猫ウサギは抗議の声を上げる。
「ふふっ、さてそろそろ私も負けないように一働きしてくるわ。私がいない間はローレン様を頼んだわよ？」
ひとしきり猫ウサギと戯れたクロエルは一声かけるとその場を後にする。やるべきことはたくさんあるのだ。

その後ろ姿を猫ウサギが一声鳴き見送った。みゃおーん。

生き残るために

フォーランド領。緑多く温暖な地方にあるこの領地は、その七割が草原に占められており農業と牧畜が主たる産業だ。
残りの三割は森林となっており森の恵みも多いが、ときおり現れる妖魔への対策も求められる為、特別に裕福な土地柄ではない。
また領地は決して広くはないが、ここ百年以上大きな災害にあうこともなく安定した暮らしを領民たちに与えていた。
なお武を尊ぶフォーランド家の家風の通り、精強な兵を持つ事でも有名だった。

夕暮れの小高い丘、赤く染まった大地を人々が列をなして進んでいる。
向かう先には幅三十メートル奥行き二十メートルほどの長方形の建物がある。高さは五メートルほどだが四隅に十メートルほどの塔が建っている。さらに建物から十メートルほど離れた周囲には木を組んで作った高さ二メートルほどの柵。
そこが近くの村の者たちから砦跡と呼ばれている場所だった。
様々な物資を運び入れる人々、砦跡を囲む柵を修繕し堀に水を通す準備に走り回る男たち、かつて妖魔との戦争で使われた砦はひさしく放置されていたはずだが、早くも本来の姿を取り戻し始めていた。
もっともその素早い復旧には理由もある。
近くの村の子供たちが毎年夏に集められ、簡単な護身術や野外活動のイロハを教える場として使用されていたのだ。その際、大工仕事の練習がてら大きな破損などを修繕していたらしい。
クロエルがこの砦跡を使うことを考え付いたのも、村人たちが避難することに同意したのも、砦跡がまさに砦としての機能をまだ有していると知っていたからだった。

「よおし、これで最後だ。がっちり組み立てるぞ！　ぬかるなっ！」
立派な髭を蓄えた老人が腹に響くような声で檄を飛ばすと数人の男たちが声を揃え気合を入れた。それぞれが大工道具を手に木材を組み上げていく。
砦の周りではそんな光景がいくつも見られた。誰もが生き残る為の努力を怠らずに働いている。
それは死が隣り合わせの世界で生きているからこそ持っている強さ。
「日本で同じ状況になっても、こうはいかんだろうなぁ」
避難を始めてまだ5時間程度だというのに逞しく働く人々を、ローレンは離れた場所から頼もしく見ていた。
そして振り向くと遠く森が見える。
「さて、私も自分の仕事をするとしようか」
ローレンは構えた吟唱棍をゆったりとした拍子で地面へと突き立て始めた。

“山を越え、丘を渡る風
雲を裂き、降り注ぐ光
震えるような息吹は歌うように
空を目指す想いを奏で続ける
その響きは神々へ、その思いは神々へ
命の輝きは山を越え、雲を裂き
きっと届くだろう“

「おや？　これは…？」
「へえ、なかなかの歌いっぷりじゃないか、誰が歌ってるのかしらねぇ？」
風に乗って聞こえてきた歌。忙しく砦の修繕に働いていた人たちは、皆がそれに気がつき、耳を澄ます。

そしてその歌を、魔導詩を聞いていたのは人だけではなかった。冬の寒さに枯れていたローレンの足元の枯れ草が草原の緑へと変わっていく。
「なんだありゃ…」
「あのオッサン魔法使いだったのか」
皆の見ている前でローレンの歩く周囲に次々の緑の絨毯が敷き詰められていった。
そんなあっけにとられる光景を見ていた人々の内、一人がぽつりと言った。
「でもよ、草を生やしたからなんだっていうんだ？」
「なにってそりゃ……なんなんだ？」
答えられる者はなく一斉に首を傾げた一同だったが、この1時間ほど後、当のローレンから草の使い方を聞くと、その単純さに効果があるのかと再び皆で首を捻ることになった。

それからおよそ5時間後。
すでに夜も深く砦の各所に灯火がつけられ、塔の上や柵の内側など数か所に見張りが立っている。
砦の中は多くの女性や老人、子供など戦うことの出来ないもので占められ、男たちは最後の打ち合わせの為入口の大扉前に集まっていた。灯火用の油の匂いが立ち込めるその場には五十人ほどの村人が集まっていた。
主に十代から五十代までの男が多いが、若い女や頑健な老人の姿も散見される。
クロエルとローレン、さらに村のまとめ役である数人の男たちは最後の打ち合わせを行うため彼らの元に向かっていた。
「なんとか間に合ったようだな」
「はい、皆よくやってくれました」
「そうだな、あとは我々が彼らの努力に報いる番だ」
「勿論です。必ず生き残りましょう」

砦や集まった村人たちを見て呟いたローレンにクロエルが答え、村人たちの前へと進み出る。
あるものは不安げに、またあるものは戦いを前に高揚した様子の村人たちの前へ一人立ったクロエルに人々の目が集まる。それを十分に意識しながらも、クロエルは一人一人の目を見るように皆を見回し、そして軽く片手を上げた。
すると、いままで囁くように話しあっていた声がピタリと止み、静けさやってきた。
なるほど、人の上に立つ人間というのはこういうものか、ローレンが心の中で呟いたとき、クロエルが口を開いた。
「まずは皆の苦労を労わせてもらいます。御苦労さまでした。　我々は生き残るための準備を無事に終えることが出来ました」
ゆっくりと話し始めたクロエルはそう言って微笑んだ。大輪の花が咲いたような、華のある笑顔だ。しかし、柔らかな眼差しはやがて力を増し、人々は視線を放さなくなる。
「しかし、まだ足りません。これから我々は命を賭けて戦うことになります。そこを乗り切って初めて、我々は自分を家族を仲間たちを守ることが出来るのです」
一度言葉を切り、集まった村人たちを見回す。クロエルを見つめる男たちに迷いは見えない。それを確認し大きく頷く。
「ではこれより作戦を説明します。全て理解する必要はありません。ただそれぞれの役目を全力で果たしてください。そうすれば、我々は勝てます！」
クロエルが力強く言い切ると村人たちに熱気が溢れる。勝利を信じさせる力がその言葉にはあった。
だから直後にクロエルが振り向き確認するような視線を向けてきたのはローレンにとって意外だった。だが、どれほどしっかりしていようと彼女はまだ十七歳の少女なのだ。人の命を背負うことに戸惑いや恐れがあって当然だった。
「せめて私に出来るだけのことはしてやらなければな」

ローレンは小さく呟き、クロエルを安心させるために笑顔で頷いた。

生き残るために（後書き）

あまり書いたことのないシチュエーションなのでなんとも…難しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1126z/

灰色の吟遊詩人　ローレン

2011年12月20日01時47分発行